

して集めたのは序文によると「若古官名冠服器用鳥獸花果等有裨參考者、別爲補篇」と斷つてある。

第三には三體清文鑑、即ち御製滿珠蒙古漢字三合切音清文鑑である。これはつまり前の蒙古清文鑑と増訂清文鑑とを合せて一つとしたものであつて、滿語、蒙語、漢語と順次左より右に並べ、滿語蒙語には各々其の左側に漢字の切音で發音を示し、漢語の下には滿字と蒙古字とで其の發音を表はしてある、これは四庫全書提要によると、乾隆四十四年に勅撰せられたのであつたが、四十五年に刊行せられたものと見えて、同年の御製序文が卷頭に載せてある、これによると此の書編纂の次第を、能く窺ふことが出来る、即ち「前書（増訂清文鑑）」祇載國語漢語、而未及蒙古、此書乃並載蒙古語、所爲異於前書者、是不可以不闡義、我國家自太祖太宗以來、近邊諸蒙古部落、久爲世臣、而至今則喀爾喀、青海及準噶爾之四衛拉特、前後歸順、蓋無一蒙古之非我臣矣、……朕卽位初、以爲諸外藩歲來朝、不可不通其語、遂習之、不數年而畢能之、至今則曲盡其道矣、侵尋而至於回語、亦既習之、亦既能之、既可以爲餘暇之消遣、復足以聯中外之性情、因悟天下之語萬殊、天下之理則一、無不戴天而履地、無不是是而非非、……故向有校正金元國語解之命、及製西域同文志、豈是義也」と、天子親から其の領土内各國の語を研究され、またその研究を重要視されたが爲に、此の書の製作があり、また四體五體の文鑑も同様の次第で出來たものであることを知り得るのである。四庫全書提要によると三十三卷となつて居るが、自分の見た處のものは總て三十一卷で、序文凡例等を載せた一冊とともに、三十二冊に別れて居る、三十三卷といふのは如何であらうか、此の書に卷數を別にした二種類があらうとは思はないが、暫らく疑問として存して置く。

第四には御製四體清文鑑である、即ち滿洲蒙古西藏と漢文との合璧であるが、これはたゞ各國語を、滿藏蒙漢の